

救急車を

呼びました

『救急車を呼びました』

平塚 直隆

登場人物 男1

男2

会社の食堂。

自販機の前に長椅子がある。

そこで男1は手作りのサンドウィッチを食べている。

男2が、お盆を持って通り過ぎていく。

しばしの間。

男2、戻って来て、

男2 大丈夫ですか？

男1 え？

男2 …。

男1 何がですか？

男2 救急車呼びましょうか？

男1 …は？

男2 救急車。

男1 …え、何か変ですか、私？

男2 いや、大丈夫ならいいんですけど…。

男1 顔色、悪いです？

男2 ああ、でも普段を知らないのです…。

男1 …は？

男2 大丈夫ですか？

男1 …大丈夫じゃなく見えるんですか？

男2 無理されてないですか？

男1 …無理してるように、見えるんですか？

男2 大丈夫ですか？

男1 どっちなんですか？

男2 じゃあ、大丈夫なんですかね。

男1 …大丈夫ですよ？

男2 じゃあ、良かった。

男1 …私の、一体どこが大丈夫じゃないように見えたんですか？

男2 そうですよ、全然大丈夫そうですね。

男1 ええ。

男2 すみませんでした。気にしないでください。

男2、去る。

男1 …。

男1、サンドウィッチを食べる。

男2、戻って来る。

男2 本当に大丈夫ですか？

男1 …なんですか？

男2 おかしいなあ…。

男1 …何がそんなに気になるんですか？

男2 どうして私は「大丈夫ですか？」なんて聞いたんですかね？

男1 …私に聞かれても。

男2 あれ？

男1 私が大丈夫じゃないように見えたから、聞いたんじゃないんですか？

男2 まあ、そう、ですよ…。

男1 あなた救急車まで呼ぼうとしたんですよ？

男2 おかしいなあ。

男1 ちよつと心配ですね…。

男2 あ、やつぱりどこか思い当たる節が？

男1 いや、あなたの…、

男2 え？

男1 頭…。

男2 頭？

男1 …え、じゃあなんですか、あなたは、私の頭の方が大丈夫ですかって聞いたんですか？

男2 いやいやそんな、だって、サンドウィッチ食べてるだけですよ？

男1 そうですよ。

男2 じゃあ、大丈夫なんですよ。

男1 大丈夫ですよ。

男2 あれ？

男1 なんなんですか一体…。

男2 そのサンドウィッチ大丈夫ですか？

男1 …はあ？

男2 サンドウィッチは…。

男1 サンドウィッチは大丈夫ですよ。今朝妻が作ってくれた物ですから。

男2 あれ？

男1 何なんですかその「あれ？」って？

男1、サンドウィッチの臭いを嗅ぐ。

男2 大丈夫ですか？

男1 大丈夫ですよ。

男2 そうですか。

男1 失礼だな…。

男2 あれ？

男1 その「あれ？」っていうの止めてもらえませんか？

男2 じゃあ何だろう…。

男1 …。

男1、食べかけのサンドウィッチを容器に戻す。

男2 食べないんですか？

男1 …食べますよ。

男2 大丈夫ですか？

男1 …食べますか？

男2 あ、いえ…。

男1 美味しいんですよ、でも、あなたが変な事ばかり言うから…。

男2 おかしいなあ…、どうして私は大丈夫ですか？なんて聞いたんだろう…。

男1 あ！あれですか、あなたは、何か、その、そういう、不思議な何かを感じ取る事が出来る人なんですか？

男2 …ああ、そういう人居ますよね。

男1 違うんですか？

男2 …なるほど、私にもそういう力が、出ちゃったと？

男1 …いや、分からないですけどね…、そんなに大丈夫か気にされるって事は、何かあるのかなと…、いや、何も無いですよ、私は。

男2 そうなんですよ…。おかしいなあ。

男1 …まだ気になりますか？

男2 いや、もうあなたが大丈夫かどうかとか、そういう事は気になってないです。

男2 あとは私の方で…、あなたにそこまで言われると、やつぱり私の問題なんだと思

います。

男1 いや、そこまでの事は言っていないですけど、ただ、おかしな事、言うなあと思
つて…、

男2 おかしな事言いますよね。

男1 言いますよ。

男2 …奥さん、大丈夫ですか？

男1 …ちよつと、もうやめてくれませんか、心配するの。

男2 そうですよね、気持ち悪いですよね。すいません。

男1、携帯電話をチラッと見る。

男2 電話します？奥さんに。

男1 しませんよ。

男2 ああ…。

男1 …なんで妻が大丈夫なのか、気になったんですか？

男2 サンドウィッチ作ったって、仰ったんで…。

男1 サンドウィッチくらい作るでしょうよ…。

男2 そうですね…。

男1 …。

男2 めんどくさいですよ、サンドウィッチ。

男1 …は？

男2 ピクニックみたいですね。

男1 …。

男2 ああ、お子さんが遠足で、そのついでに、なるほど。

男1 子供は居ません…。

男2 ああ…。

男1 …。

男2 まあ、お弁当のチョイスは、人それぞれですから…。

男1 初めてです、サンドウィッチ…。

男2 …大丈夫ですか？

男1 …大丈夫ですよ。

男2 救急車呼びますか？

男1 救急車呼ぶほどではないですよ。

男2 そうですか…。

男1 唄歌ってたんですよ、鼻歌…、アルプス一万尺。

男2 あれって、外国の歌みたいだけど日本なんですよね？

男1 そう、岐阜と長野の県境、上高地の辺り…。

男2 じゃあ朝出れば、そろそろ着く頃ですね。

男1、携帯を見つめる。

男2 電話、してみたらどうです？

男1 電話したって仕方がないですよ…。

男2 気になるなら聞いてみたらいいじゃないですか、

男1 何を？

男2 今どこに居るのか。

男1 そんな事聞ける訳ないじゃないですか。私は、本当にそういうの、嫌いなんです。

男2 だから、そういう時に便利な言葉があるじゃないですか。

男1 …なんですか？

男2 大丈夫ですか？つて。

男1 突然大丈夫？…なんて聞かれたら、恐いでしょう…。

男2 疾しいところが無ければ、恐くないですよ。

男1 そりゃあ、そうかもしれないが…、(携帯を持たずに) もしもし？

男2 はい、もしもし。
男1 あ、俺…。
男2 …え、なに、どうしたの？
男1 あ、あのさ…大丈夫？
男2 …何が？
男1 いや、大丈夫かなって…、
男2 …なんでそんな事聞くの？
男1 いや、深い意味は無いんだけど…、
男2 …。
男1 もしもし？
男2 はい。
男1 まあ、大丈夫ならいいんだけど…。
男2 大丈夫だよ。
男1 そう、なら良かった。
男2 …じゃあね。
男1 あ…、あの、今日、早めに帰るから。
男2 …。
男1 もしもし？
男2 何時？
男1 …七時。
男2 はい。
男1 …これは完全にアウトだ！
男2 実際はそうならないかもしれない、掛けてみましょう。
男1 …ちよっと、頭が痛くなってきました。
男2 あ、大丈夫ですか？
男1 …確かに、昼間は本当に何をしているか分からないんです。
男2 ちよっと、横になりましょうか。

男1 すぐに治まると思います…。
男2 こっちに頭を、ゆっくり。
男1 はい…。
男2 どうぞ、支えてますから。

男1、横になる。

男2 足、曲げましょうか。
男1 心臓が痛いです。
男2 落ち着いて、ゆっくり呼吸をして下さい。
男1 そんな事、これっぽっちも考えた事無かったです、まさか私が仕事している間に他所の男とピクニックに行っているなんて。
男2 今日はいいい天気ですから。
男1 どうして雨が降らなかつたんだ、こんな日に限って…。
男2 昨夜は良く眠れました？
男1 割と、良く眠れた方だと思います…。あー何を良く眠っているんだ、妻に浮気されている分際で！
男2 ご自分を責めないでください。朝食は、食べられました？
男1 はい…。
男2 何を食べました？
男1 ご飯と、みそ汁と、納豆と、卵と…、野沢菜と、あの、鳥の手羽元を、甘辛く煮た奴と、それから、
男2 それから？
男1 食べ過ぎだろうが！
男2 晩御飯の残り物だったんですよ？
男1 そうですね…。え、まさか残り物に？！
男2 落ち着いてください、まだ奥さんが何かを入れたと決まった訳ではありません

から。

男1 最近ちょっと味が濃いと感じていたんです…。

男2 その辺りの事は、司法解剖の結果を待ちましょう。

男1 はい…。

男2 午前中は、普段と変わりなくお仕事をされたんですよね。

男1 …はい。

男2 今はお昼休憩ですね。

男1 そうです。

男2 お昼にしては遅いですね。

男1 うちフレックスなので、僕はいつもこの時間です。

男2 空いてますもんね。

男1 え、解剖されるんですか…！

男2 ここ、分かります？触れているの。

男1 はい、わかります…。

男2 ここは？

男1 もう解剖するんですか？！

男2 どういう症状なのか、確認しているだけですよ。

男1 …はい、わかります。

男2 ここは？

男1 わかります。

男2 (触らず) ここは？

男1 …わからないです！え、どこですか？どこ触ってますか？！感覚が無いです先生！

生！

男2 大丈夫ですよ、どこも触ってないです。

男1 …(歯を食いしぼる)。

男2 正常ですよ、安心して下さい。

男1 …先生、私は、死ぬんですか？

男2 私は医者ではないので、なんとも…。

男1 …。

男2 …。

男1 …じゃああなたは、何者なんですか？

男2 私は今日、アルバイトの面接に来たんです。

男1 …。

男2 その場で不採用になったので、せっかく来たんだから食堂くらいは寄っておこうと思っまして。

男1、呼吸が荒くなる。

男2 大丈夫ですか？今、救急車を呼びますね。

男1 その前に、妻に電話をしてもいいですか。

男2 そうですね、声を聞かせてあげてください。

男1、電話を掛ける。

男1 あ、もしもし？

男2 もしもし？

男1 …あ、俺。

男2 うん、どうしたの？

男1 …あのさ、今どこ？

男2 家だよ。

男1 …そう。

男2 どうしたの？

男1 いや、ちょっと、会社で、具合悪くなっちゃってます。

男2 え？

男1 なんか、変な人に話しかけられちゃって、それからちよつと、具合悪くなつち
やっただよね…、

男2 変な人？

男1 アルバイトの面接に来ただけで、その場で落ちた人。

男2 うん…。

男1 なんか、その人と喋ってるとき、具合悪くなつちやうんだよね。

男2 え？！

男1 だから、ちよつと、救急車呼んで貰って、病院行ってくるわ。

男2 う、うん…。

男1 また連絡する。

男2 え、大丈夫なんだよね？

男1 …うん、まあ、ちよつと分かんない。連絡するから。

男2 わかった…。

男1、電話を切る。

男1 これは、どういう事なんでしょう…。私が妻に電話をすると、なぜ君が喋る

…！！！！

男2 どうでした、奥さん？

男1 出ませんでした。

男2 ああ…。

男1 留守電に変な事を吹き込んでしまったじゃないですか…。

男2 今のを聞いたら、すぐに掛け直して来ますよ。

男1 でしょうね…。

男1、フラフラと立ち上がる。

男2 あ、どちらへ？

男1 ちよつと、あの、仕事に戻らないと…。

男2 無理ですよそんな状態では。今、救急車を呼びますから。

男1 いや、あの、大丈夫そうなんで…。

男2 全然大丈夫ではなさそうですね？今のあなたは誰が見ても大丈夫ではないで
す。

男1 うん、それは、あの、だいたい分かって来たんですけど、あなたと、一緒に居
るからだと思うんですね。

男2 え？

男1 最初から訳が分からないと言うか、なんか、イライラするし、あの、そつとし
て頂ければ、すぐに良くなると思いますので。

男2 …分かりました。じゃあ、もし、救急車呼んで欲しくなったら、いつでも言っ
てください、私ここでご飯食べてますから。

男1 …まだ食べてなかったんですか。

男2 ちよつとどこで食べたらいいか分からなくて、この会社の人でもないのにテー
ブル席で食べるのも気が引けるじゃないですか。

男1 …そんな気を使うくらいなら食堂なんか来るんじゃないか。

男2 でも食堂ってその会社の質が出ると思ってるんですよ僕。あ、ちよつと、じ
ゃあいいですか？冷めてしまうんで。

男1 …はい。

男2、座って食べ始める。

男1、這うようにこの場を離れようとするが、身体が言う事を聞かない。

男2 (食べて) あー、冷めてるなあ。でも冷めてる事を差し引いても、やっぱここ
の程度か…。

男1 …君ね、

男2 あ、救急車呼びますか？

男1 …そりゃあ君、その場で落とされるよ。

男2 え？

男1 …。

男2、お腕を持って、

仰向けに倒れている男1を覗きこみ、

男2 (食べながら) もう限界なんじゃないですか？そんな無理をしても良い事なん

て少しもないですよ？呼びますよ、救急車。

男1 …もし、もう限界だと思ったら、別の人にお願いますから、大丈夫ですよ。

男2 でもお願い出来るような人はどこにも…、どうなってるんだこの会社。ちゃん

と仕事してるのか？

男1 仕事してるから居ないんだよ…！

男2 この味じゃあな、そりゃあ外に食べに行きますよね。

男1 君も早く食べ終わって、帰りなさいよ。

男2 でも僕が居なくなったら、誰が救急車呼ぶんですか？

男1 すぐに、良くなると思いますから…。

男2、いったん長椅子に戻り、漬物を食べ、また戻って来る。

男1 …。

今度は、みそ汁を一口すすって、また戻って来る。

男1 お前もうそつちで食べ…！

男2 だって大丈夫ですか？

男1、顔に唾がかかるので顔を拭い、

男1 俺の事は良いから黙って飯食ってるバカ。

男2 …すみません。でも私、だから早く救急車を呼ぼうと言ったじゃないですか、

という台詞はもう二度と言いたくないんです…。

男1、首をもたげ見る。

男1 二度と…？

男2 高校生の時に一度、その台詞を言った事があって…、それがずっと心残りなん

ですよ。

男1 …誰に？

男2 同級生です。

男1 …どうなったの、その同級生は。

男2 死にました。

男1 …。

男2 前触れもなく、急に。目の前で、電池が切れたみたいに死にました。

男1 …原因は、なんだったんですか、過度のストレスですか？

男2 日本の製薬会社が細菌兵器を開発したんですね、それをどこの国に売ろうとしたんですけど、輸送中に外に漏れて、大気が汚染されるんですね。その事を、その製薬会社は秘密にしていたので、それ以来、個体差はあるんですけど、人が突然死するようになるというストーリーだったと思います。

男1 …ストーリー？

男2 はい。

男1、這いつくばって動き出す。

男2 僕、高校生の頃、演劇部だったんです。

男1 もう、君とは喋らん！

男2 だって台詞って言ったじゃないですか、その台詞はもう二度と言いたくないって。僕その台詞、思い切り噛んじゃって、だから早く救急車を呼ぼうと言ったじゃないですか？って言う台詞を、だから早く救急車を呼ぼうと言ったじゃないですか？ってあれ？言えてますね…。なんだったかな、でも言えるようになったんだからまあいいか。なんか暗い、いつも誰かが死ぬ芝居やってましたね。面白くないとすぐ誰かが死ねばいいと思ってたんですね、しかもすぐ幽霊になって出て来るし、本当最低でしたね。

男1、床を這いずっている。

男2 …すみませんなんか、怒らせるつもりはなかったんですけど。…大丈夫ですか？僕いつでも救急車呼びますからね？

男1 もう、うるさい！私は、大丈夫だから、大丈夫そうに見えなくても、私は、大丈夫なんだ。だから、もう大丈夫かどうか聞かないでくれ。

男2 …すみません。じゃあ大丈夫なんですね…ああ。

長椅子に置いてある男1の携帯電話が鳴る。

男2 あ、奥さんじゃないですか？！良かったですね、これはピクニックじゃないと思いますよ。ピクニックだったら掛け直して来ないですもん。周囲から聞こえる木々のざわめき、川のせせらぎ、小鳥のさえずりのリスクを冒してまで、掛けては来ないですよ。

男1 …。

男1、身体を丸める。

男2 出ないんですか？

男2、電話に出る。

男2 もしもし…。あ、あの、えっと…あ、奥さんですか？…ああ、そうです、先程のあの、留守電の、アルバイトにその場で落ちた者です、初めまして。…あ、旦那さん、今、床でうずくまって、あ、…あ、はい。

男2、男1の傍へ行き、

男2 あの、奥さんなんですけど、「大丈夫？」って言ってるんですけど？

男1、苦しくなる。

男2 (電話に) あ、あの、大丈夫だって本人言ってるんですけど、あ、はい。(男1に) ほら、大丈夫？って聞いてますよ。ねえ、あの、大丈夫？って、ほら。大丈夫？って…。大丈夫ですか？ほら、奥さんも大丈夫？って。大丈夫ですか？

男2、電話を近づけるが、男1は頑なに電話に出ようとしなない。

男1 救急車！救急車来てください！

く終く

【出演】

男 1 …… 中尾達也
男 2 …… 平塚直隆

この戯曲の著作権は、作者である平塚直隆にのみ帰属するものです。
上演許可あるいはその他のお問い合わせは、作者の所属する「オイスターズ」までご連絡ください。

■ オイスターズ ■

ホームページ

<https://oysters.official.jp>

メールアドレス

theatrical_unit_oysters@yahoo.co.jp